城一本平家物語における「髑髏尼物語」の形成

浜畑圭吾

はじめに
一、城一本研究史概観
二、平家物語四本における「髑髏尼物語」の相違
三、城一本の加筆記事
四、「若君」の強調
五、六代物語との連関
おわりに

八坂系平家物語の一種である城一本平家物語は、その刊記に城一ゆかりの平家物語であるという伝承を記す伝本である。現在では城一に仮託したものと考えられているが、そうした権威を利用して、新しい平家物語を創り出そうとしたものとして注目される。

本稿では『源平盛衰記』から取り込んだと思われる「髑髏尼物語」をとりあげた。『盛衰記』で設定された重衡救済物語の文脈から切り離し、六代物語との連関を深めるために、処刑された若君の前景化を進める城一本の形成過程を明らかにした。

はじめに

八坂系平家物語については、高橋貞一氏の分類、渥美かをる氏の系統立てを経て、現在は山下宏明氏の分類により、その輪郭を捉えることが出来る。[1] 氏は一類から五類までのうち、一類本と二類本を中心的な本文、三類以下を、

八坂流と言うよりは、八坂系とも言うべきもので、八坂系第一・二類および一方流の末流本文と見るべきこと。

としているが、[2] 近年そうした本文の混態が、諸本の形成に重要な意味を持っているということが明らかになりつつある。[3] 本稿で扱う第五類の城一本も、一方系諸本と二類本との混態であるとされてきたが、城一検校所用の平家物語を写したものという特異な刊記を持つものである。その内容について、現在では仮託されたものと見られているが、そうした伝来事情を考えると、その本文も単純に混態として片付けるべきではない。複数の平家物語を組み合わせて新しい平家物語を創り出していく動機、その文脈をすくいとる必要があるだろう。

そこで本稿は、城一本が『源平盛衰記』（以下『盛衰記』）から取り込んだと考えられる「髑髏尼物語」を取り上げ、その再編集の実態について考察してみたい。

「髑髏尼物語」は、城一本、延慶本、長門本、『盛衰記』の四本に見られるものである。しかし従来、読み本系三本を中心に研究が進み、[4] 城一本は『盛衰記』の影響を受けたものという認識に留まっている。本稿では、城一本が同物語を取り込んだ動機、そして再編集されたことによって形成された文脈を明らかにしたい。

一、城一本研究史概観

平家物語研究において、城一本が取り上げられることは少ない。よってまずはその研究史を概観しておく。

山崎美成の『歌曲考』[5] に、「八坂本平家物語十二巻」として見える次のような記事が、城一本の初出と考えられる。

この本を八坂といへるは、本書の奥書云、

寛永三年の春の比、藤田検校城慶、加賀国にて、筑後方検校城一用ゆ、雲井の本と奥書侍る、平家物語を求め侍りき。此本則雲井と奥書侍る故に、藤田検校城慶、此本を用て、八坂方の平家と号す。

寛永三年（一六二六）に城慶という検校が、城一検校所持と伝える「雲井の本」なる平家物語を写して、八坂本としたという内容である。琵琶法師の始祖生仏から繋がる如一の弟子が、覚一と城一であるという伝承があり、[6] つまりは、覚一本に匹敵する古さと来歴を有する伝本ということ

になる。これは文政十三年（一八三〇）刊『嬉遊笑覧』巻之六上にも掲載されている。[7]

ただし、こうした記事に該当する伝本の存在は近代に入っても確認されず、山田孝雄氏は「雲井の本」とは一方本のことであり、『嬉遊笑覧』の記す「八坂方の平家」は一方流の本ではないかと推測していた。[8]

しかしその後、これとほぼ同文の刊記を持つ巻十二のみの楠美音三郎氏所蔵の平家物語（古活字本、現東京藝術大学図書館所蔵本、以下東京藝術大学本）が発見された。その刊記は次のようである。

寛永三年の春の比藤田検校城慶加賀国にて筑紫方検校城一用ゆ雲井の本と奥書侍る平家物語を求侍き此本則其雲井の本を写已筑紫方検校城一本と奥書侍る故に藤田検校城慶此本を用て八坂方の平家と号す

これを受けて山田氏は前掲書での分類を修正し、「灌頂巻を立ててなお八坂本の如き形にせる本」として新たに分類した。[9]その根拠は、通常八坂系では、巻十一や巻十二に分散されている建礼門院関係記事を巻十二の途中に集め、「平家物語くはんぢやう巻」とする点である。山田氏はこれを灌頂巻への過渡期を示すものとして「平家物語研究の絶好資料」と評価した。

その後、昭和十三年（一九三八）に川瀬一馬氏[10]によって奈良県百々家より完本の城一本が発見、紹介されたことで、全体像の把握が可能になった。早速検討を加えた高橋貞一氏の調査に拠って、巻十二の巻末に東京藝術大学本には欠けていた寛永五年（一六二八）の刊記が紹介された。そして氏はその本文を、

八坂流本と一方流本との合流を目指し、且つそのすぐれた詞章を採擇せんとしたのではあるまいか。

とし、[11]山下宏明氏[12]もこれを追認している。この伝本は後に小汀利得氏の手に渡ったが、現在は所在不明である。

現在、完本として確認できるのは、昭和五七年（一九八二）に國學院大學が弘文荘より購入した國學院大學図書館本（以下、國學院大學本）のみである。その刊記は東京藝術大学本と同じだが、次のように、小汀本と同様の刊記が続いている。[13]

于時寛永五戊辰暦
九月上旬
洛陽三条寺町
中村甚兵衛尉開之

従来、城一本の本文としては、以上の三本が紹介されてきたが、国立国会図書館にも一本十二冊（請求記号WA7-271）が所蔵されている。ただし巻六、巻十二が正保三年製版本の取り合わせであり、完本ではない。[14]

城一本は従来その刊記が注目されてきたが、現在では「城一ゆかりの平家物語」は仮託とされており、池田敬子氏[15]は城一本刊行の五年前、元和九年（一六二三）に一方検校によって刊行された流布本に対抗したものではないかとしている。本文については、一方系と八坂系の混態本と見られているが、延慶本、長門本、『盛衰記』などの読み本系諸本との一致箇所も見え、千明守氏[16]は、混態ではあるが「本文上の矛盾点は巧妙に処理されているようである」として、再編集する姿勢を評価している。稿者[17]も以前、城一本が『盛衰記』を参照して改編を加えたと考えられる王莽説話について検討し、その積極的な編集態度を評価した。城一に仮託して新しい平家物語を創出していく城一本の実態は今後も追究されるべきであろう。

二、平家物語四本における「髑髏尼物語」の相違

本稿で取り上げる「髑髏尼物語」は、城一本、延慶本、長門本、『盛衰記』の四本に見られる。ただし、延慶本と長門本は経正の遺族であり、『盛衰記』と城一本は重衡の遺族の物語、と異なっている。前稿[18]と重なるところもあるが、論述の都合上、四本の位置と異同について確認しておきたい。

延慶本第六本卅九「経正ノ北方出家付身投給事」は、宗盛親子の処刑、重衡の処刑、宗盛親子の梟首と続いた後に配されている。経正の遺児が処刑され、その母である北方が出家ののち、渡辺川で入水するという経正遺族の物語である。長門本では巻第十八にこれを置くが、重衡処刑、宗盛親子の記事が巻十九にあるため、ひとつながりの配置とはなっていない。延慶本の重衡処刑と宗盛親子の梟首、そして「髑髏尼物語」が「無慚」という評語でつながっており、こうしたかたちが元の姿で、長門本はそれを解体したものであるが、吉田にあった建礼門院が「深山ノ奥ニモ入ナバヤ」（延慶本）と決意するに至る平家哀史として機能している点は両本共通である。

これが『盛衰記』では、北条時政の上洛、義経の都落ちの後、六代捕縛の直前である巻第四七に「髑髏尼御前」として移されただけでなく、重衡遺族の物語へと改変されている。延慶本や長門本が本来の形であり、『盛衰記』の改変は重衡救済の物語への組み込みを意図したものであると前稿では論じた。

城一本の「髑髏尼物語」も巻第十二にあり、『盛衰記』を参照しての挿入であることは疑いない。ただし相違点もある。重衡との若君の首を持った北方は天王寺の西門へ向かい、「七日七夜」の念仏の末、難波の沖に身を投げるのだが、『盛衰記』ではその後に、翌朝、北方を引き上げた

西門に集まっていたものたちが遺体を荼毘に付し、西門で追善供養を行っている。そのことを聞いた僧が上洛した際、長楽寺の印西にこれを伝え、印西もまた諸僧を集めて親子の供養を行うのである。この後日の供養譚が、城一本には見えない。城一本が参照した『盛衰記』の本文にこうした文章がなかった可能性もないわけではないが、おそらく城一本が取り込んだ際にこれを削除したものと思われる。

長楽寺の印西（延慶本、長門本は湛敬）は、物語冒頭で若君の処刑に遭遇し、その供養、北の方への教化と出家の戒師を務め、親子の導師としての役割を担っている。『盛衰記』が、この親子の供養の後に、

母上モ若公モ縦罪業深クトモ印西上人ノ志ナトカ不レ出テ生死ヲ一。

と結ぶのは、そうした一貫した印西の導きがあったからであるが、親子の「罪業」が強調されるのは、重衡との関わりのためである。よって、後半のこの供養譚がなければ、重衡とその遺族の救済物語に改変された意味も薄れてしまうことになる。そのような観点で『盛衰記』と城一本との相違を見てみると、同様の例が他にも見える。

若君が処刑された直後、跡を追おうとする北の方に対して印西が、次のように教訓する。

上人サラテタニ女人ハ五障三従トテ、罪深キ御事ニテ侍リ。我カ御身コソ悲シキ地獄ニ落チ給フ共、サシモ御糸ヲシキ若公ノ刀ノサキニ懸テ失給ヌルヲ、御弔モナクテ、悪キ道ヘ堕シ奉ラント思シ召シ侍カ、長闇路ヲ祈助ケ給ハンコソ、遠キ御情ニテ侍ヘケレ。一樹ノ陰一河ノ流レト云事モアレハ、先キ立チ給フ御歎ハサル事ナレ共、無キ人ノ御為ニハソモ由シナシナト一度ハ教訓シツ。一度ハ威シツ宣ケレ共、猶ヲ悲ノ涙色深シテ、同道ニト焦給ケルカ、ヤヽ暫アリテ、女房サラハコヽニテ様ヲ替ハヤト宣ヘハ、上人ソレハサルヘキ御事ニモ侍ルヘシトテ、

印西は自害しようとする北方に対して、若君の供養のために出家することを勧め、最後には北方もこれを受け入れている。ここでも若君は「悪キ道ヘ堕シ奉ラン」「長闇路」などとされ、重衡の縁による堕地獄が仄めかされているが、これが城一本では、

上人とかくけうくんして、

とあるのみで、その後の北方の出家に続いている。

また、北方が投身の直前、『盛衰記』では西に向かって手を合わせ、

南無帰命頂礼阿弥陀如来太子聖霊先人羽林、若君御前、必ス一ツ蓮ニ迎ヘ取リ給ヘ

と唱えているが、これも城一本には見えない。「羽林」す

なわち重衡と、若君、自身の往生を願うこの一文は『盛衰記』が「重衡とその遺族の救済」を主題としていることを表しているが、これを削除した城一本では、そうした主題は後退したと見るべきであろう。

本来、経正遺族の物語を重衡遺族の物語へと『盛衰記』が改変したのは、これを「重衡救済物語」の一部とするためであった。しかし城一本では、そうした重衡の救済に関わる記述は削除されていく傾向にある。城一本が『盛衰記』を参照したことは疑いないところであるが、そのまま引き写しにしたのではなく、別の文脈が与えられたと考えるべきであろう。

そこで次に城一本が加筆したと考えられる部分を抽出し、そうした問題について考えてみたい。

三、城一本の加筆記事

城一本は適宜文章を挿入し、前後の矛盾を解消しようと努めた本文であるが、そこには単なる辻褄合わせだけでなく、別の文脈を作るための加筆もあっただろう。次のような独自記事が、そうしたことをうかがわせる。

其比とりわけあはれなりしは、ほん三位の中将重衡の卿の若君のさいご也。そも〳〵しげひらのきやうの、我は一人の子なきものとのたまひけるは大き成そらごとにてそ有ける。其故は東山ちやうらく寺の（後略）

傍線部は、直前の、平家の遺児が次々と捕らえられ処刑されていく場面に続くものであり、これから述べる「髑髏尼物語」を、「とりわけあはれ」な遺児処刑の物語として位置づけている。『盛衰記』も直前に平家遺児の処刑場面はあるが、城一本はその繋がりを強調する文脈と言えよう。

そしてその後に続く重衡の子についての記述は、重衡自身が「我ハ一人ノ子モナシ」（延慶本第六本卅五「重衡卿日野ノ北方ノ許ニ行事」）と述べる通り、多くの平家物語諸本で共通する重衡に子はないという設定を覆すものである。だが、『盛衰記』も「髑髏尼物語」の再編集に伴い、その設定も変更している。

『盛衰記』巻第三九「重衡迎内裏女房」に、

御子一人オハシマシケレ共、北方大納言佐殿ニ憚給テ世ニハ角トモ披露ナシ。

とあって、その母は内裏女房であったとされ、その後女房に再会した重衡の口からも、

罪深キ者ノ子ナレバ、枝葉マデモ末憑シクハナケレ共、イカニモシテ助隠シテ、片山寺ニ下置、僧ニナシテ我苦ヲ弔給へ。

と述べられて、『盛衰記』の「髑髏尼物語」は内裏女房とその子の哀話ということになっている。城一本の「我は一

人の子なきものとのたまひけるは大き成そらごとにてそ有ける」という一文は、こうした『盛衰記』の設定変更を継承したことによる加筆である。

しかし、『盛衰記』と城一本にも、相違点はある。重衡との再会の場面で『盛衰記』は、

コノ女房ト申ハ故少納言入道信西ノ孫桜町中納言成範卿ノ娘中納言局トソ申ケル。今年二十一ニソ成給フ。琵琶ノ上手ニテ絵書花結歌読手厳書給ケル上□細ヤカニ情深キ人ニテオハシケレハ三位中将コトニワリナキ事ニ思入給テ替ル心ナク申通シ給ケル御中也。

として、内裏女房を藤原成範の娘、中納言局であるとし、その年を二一歳と記している。巻第四七にある「髑髏尼物語」の末尾にもほぼ同内容の一文が再度挿入されており、この設定が繰り返し述べられていることになる。

一方、城一本では、巻第十「内裏女房」に次のように見える。

このねうばうと申はみんぶきやう入道しんはんのむすめなり。左衛門かうの局とそ申。そのみめかたちうつくしく、御さまゆうにおはしけり。されば中将南都へわたされ、きられ給ぬと聞きしかは、やかてさまをかへこきすめそめにやつれはて、東山ちやうらく寺のほとりにてそ、すまれけれ。其後仏法さいしよのれい地なれはとて、天王寺のおきにて終に身をなげ給ひけり。年廿三とそ聞へし。

ここでは髑髏尼の出自が「みんぶきやう入道しんはんのむすめ」となっている。平家物語諸本に登場する内裏女房の出自については、『盛衰記』を除く読み本系諸本には記載は無く、語り系諸本では「民部卿入道親範のむすめ」（覚一本巻第十「内裏女房」）とするので、城一本の方が諸本間では一般的であると言えよう。

さらに注目すべきは、城一本が内裏女房の呼称を「左衛門かうの局」とするところであるが、先述の通り『盛衰記』では「中納言局」である。これは覚一本には見えない。また、城一本が「廿三」とする年齢も、『盛衰記』では「二十一」であり、これも覚一本にはないが、この呼称と年齢の相違点については、八坂系の本文に見える。

やかて此女房涙の御所をはまきれいて、生年廿三と申春には花の袂をひきかへて、墨染の袖にやつれはて、東山雙林寺のほとりにそすまれける。この女房と申すは小原の民部入道親範の御娘、左衛門督の局とそ申ける。

第二類B種に分類される奥村家本を挙げたが、一類の東寺執行本では「左衛門佐殿」とあり、また四類の両足院本では年齢の記述がなく、やはり第二類が最も近いようであ

る。

つまり、城一本は髑髏尼を内裏女房とする設定を『盛衰記』から引き継ぎながら、その出自や呼称などの情報は八坂系のままということになる。覚一本とほぼ重なる文章に、後の「髑髏尼物語」を予告する独自本文（二重傍線部）を加筆するなど、城一本にも「髑髏尼物語」の挿入に伴う、内裏女房再会場面への再編集が行われているが、『盛衰記』の独自の人物設定は引き継いでいない。また城一本の「髑髏尼物語」に、次のような独自記事が挿入されているが、そこでも髑髏尼内裏女房説を述べるのみである。

三位の中将いきながらとらはれて鎌倉へわたされ給ひし時、八条ほり河の御たうにて行あひさふらひしに、中将おさなき者の行衛おほつかなふこそおほゆれ。かまくらの頼朝もしげひらは一人の子なきものと申さるなれは、ふかふかくしてそたてよなとのたまひしぞかし。

子の父が重衡であると明かされた後に、再度、重衡には実子があったことを強調し、重衡が八條堀川で再会した人物、すなわち内裏女房が髑髏尼であるとする独自加筆であるが、その詳細な情報は記さない。髑髏尼の出家前の情報を繰り返す『盛衰記』に比べると、城一本では女房への関心は後退していると言えよう。

そこで代わって繰り返されているのは、重衡が「一人の子なきもの」と述べる通り若君の方であり、城一本ではその「おさなき者の行衛」に焦点が当てられている。

四、「若君」の強調

『盛衰記』の「髑髏尼物語」を参照したと思われる城一本であるが、後半の印西上人による供養場面は削除されており、全体の分量としては少なくなっている。しかし前章で確認した通り、削除するだけの再編集ではなく、重衡の若君へ焦点を当てることを目的とした加筆が行われている。

そこで、四本の「髑髏尼物語」での若君に対する表現を抽出してみると左表のようになる。

	城一本	『盛衰記』	延慶本	長門本
若君（公）	12	7	2	4
おさなき者（少人、小兒）	5	5	0	3
子（悲しき子、此子など）	3	2	0	0

若君に対する直接表現が最も少ないのは延慶本で、「若君」の二例である。四本に共通することだが、若君は冒頭で処刑されるため、その登場自体が少ない。「髑髏尼物語」が、母である髑髏尼を中心とした物語であることを考える

と、延慶本が本来的な姿を示していると考えられる。同じ経正北方を髑髏尼とする長門本は延慶本より多く七例である。長門本では、

わかきみ、手をさし出て、「まゝゝゝ」と、なき給ふ。

などと、若君と母の別れの場面に独自加筆が見られる。処刑された後にも、

たゝいきたるおさなきものを抱たるやうにいたき、身にきも心もありとも見えす、ほれ〳〵としておはしけり。

という加筆があり、子を失った母の悲嘆を詳細に描いている。長門本は髑髏尼が入水した後に、紫雲の出現を記して往生の様子を具体的に描くなど、母子の哀話に筆を費やす傾向があり、そのため延慶本よりも多くなったと考えられる。

内裏女房を髑髏尼とする『盛衰記』は全十四例である。延慶本や長門本よりも分量が多いこともあるが、平家遺児の処刑譚に連なり、六代物語の直前に配されたことの影響の方が大きいだろう。

そうしたなかで、『盛衰記』よりも分量の少ない城一本が、二十例を数えることには注目すべきである。加筆された部分の一例をあげると次のようである。

捕縛された若君が連行されるのを目撃した印西上人が、その素性に対して不審に思う『盛衰記』に対して、城一本では直接、

あれは平家ほん三位の中将重衡の卿の若君にて候か、鎌倉殿よりたつね出てうしなひ給へと北条殿のもとへ宣ひつかはされけるあひだ、かやうに取て行候なりとそかたりける。

と、尋ねている。その後上人は「此人のはてみん」（『盛衰記』同）として、

若君のあとに付ておはする程に、

とあって、その後を追っている。続く若君の処刑場面でも、『盛衰記』が、

男、無二風情一走寄テ取テ抑ヘテ膝ノ下ニヲシカフカトスレハ、軈テ頸ヲソ切テケル。

とするところを、

いしのうへにかのおとこくだんのわかきみをすへて太刀をぬき、ふせいもなく取ておさへひざの下におしかふでくびかき切、

と、詳細に若君処刑の様子を記している。このように、城一本では若君の様子を具体的に捉えるための加筆が施されており、そのため若君に対する表現が増加している。これも前章同様、若君への関心の表れと考えられる。

それでは、城一本はどのような文脈を形成するためにこ

うした加筆を施したのか。そこで「髑髏尼物語」の、前後との繋がりに注目してみたい。「髑髏尼物語」前後の記事を示すと次のようになる。

A「さる程に鎌倉殿北条の四郎時政のもとへ使者を立て今は頼朝かかたきになるべきものはおほえす。たゞし」

①平家残党の処刑

B「其比とりわけあはれなりしは、ほん三位の中将重衡の卿の若君のさいご也。そも〳〵しげひらのきやうの我は一人の子なきものとのたまひけるは大き成そらごとにてそ有ける。其故は（後略）」

②髑髏尼物語

C「さる程に北条の四郎時政鎌倉へ者使（ママ）を立て、平家のしそん悉たづね出いてうしなひ申されけれは、鎌倉殿の返事には平家のしそんたつね出いてうしなはれ候事、しんへうに候。たゞし（後略）」

③六代物語

髑髏尼物語の直前には平家残党の処刑記事が配されている。これは諸本にも見られる記事だが、その冒頭にAのような本文が見える。

『盛衰記』にも頼朝が時政に指示した旨の本文が見えるので独自ではないが、六代物語の冒頭に加えられたCは独自本文であり、両者を比べてみると、城一本が設定した枠組みが見えてくる。本文Cの、平家の子弟の処刑を時政が頼朝へ報告する記事は他本にない。それを受けて頼朝が「たゞし」として、六代の捜索を命じるわけだが、そうした「たゞし」までの構成は、本文Aと同様である。

つまり城一本は、平家残党の処刑と六代物語のそれぞれの冒頭にA、Cの本文を加え、鎌倉方による「平家遺児処刑物語」とでも言うべき枠組みで再構成したと考えられる。そして『盛衰記』から「髑髏尼物語」を持ち込む際にも独自本文Bを加え、「其比とりわけあはれなりしは」とある通り、「平家遺児処刑物語」のなかの重要な哀話のひとつとしてこれを位置づけたのである。

城一本の「髑髏尼物語」で若君が前景化してくるのは、そうした「平家遺児処刑物語」を形成するためであったと考えられる。

五、六代物語との連関

「平家遺児処刑物語」の枠組みの中に、「髑髏尼物語」を位置づけるために城一本は直後の六代物語との連関も試みている。城一本が「髑髏尼物語」に加筆したと思われる

一文を中心に、『盛衰記』と比較して掲出すると次のようである。

『盛衰記』	城一本
女房宣ケルハ、 今ハ命ヲ惜ムヘキ身ニモ 侍ラハコソ 帰テモ嬉カラメ。	母上 いまは命をおしむべき身にても さふらはゝこそ
左様ニテ消モ失ナハ、 若公ト一ツ闇路ヲ 伴タラハ、 中々嬉侍ナン。	きつねおふかみなとにもおそれ さふらはめ さやうにてきえもうせなは おさなきものとおなじやみぢを ともなひて 中々うれしうさふらふへし
出日ノ如ニワリナク思ツル	人の持ぬ子をもつたるやうにおもひし
少者ニハ後レヌ。 又命惜トモ 不思ハ トテ、声モ惜マス泣詢給ケレハ、	おさなきものにはおくれぬ 我いのちおしひとも おほえさふらはす とてもたへこかれ給ひけり

若君が処刑された直後、泣き悲しむ母を説得する印西上人に対して、『盛衰記』が「出日ノ如ニワリナク思ツル」とするところを城一本は、「人の持ぬ子をもつたるやうにおもひし」と形容する。どちらも我が子の愛しさを述懐する言葉であるが、城一本のこの表現が、直後の六代物語にも見える。

わかきみ出させ給ひてのち、母上めのとのねうばうにのたまひけるは、みな人の子をまうけて後はめのとなんとが方へさしはなつてつかはす事もあるぞかし。此子をまうけて後はよのつねに人のもたぬ子をもちたるやうに人しれずふたりか中におきてこそあひせしか。

六代が連行された後の母の言葉である。乳母に預けず自らの手もとで育てた若君を、唯一無二の存在として「人のもたぬ子」とする表現は「髑髏尼物語」と重なる。

覚一本でも「人のもたぬものをもちたるやうにおもひて」（巻十二「六代」八坂系第二類本も同）とあり、六代への恩愛表現として定着していたと考えられるが、『盛衰記』には該当する本文は見えない[19]。

つまり城一本は、「髑髏尼物語」の再編集にあたって、維盛北方から六代への恩愛の表現を六代物語から持ち込んだと考えられる。『盛衰記』にはこうした本文が見えないため、八坂系の本文からの挿入であろう。それはつまり、城一本が『盛衰記』の本文を引き写しにしたのではなく、前後との関係を考慮しながらとりこんだことを示している。

髑髏尼の、若君に対する気持ちは、維盛北方の六代への気持ちに重ねられている。それは城一本における「髑髏尼物語」が、直後の六代物語との連関を強く意識した結果で

あり、両物語を「平家遺児処刑物語」の枠組みのなかで、有機的に位置づけることにもなっている。

おわりに

『盛衰記』から「髑髏尼物語」が持ち込まれた城一本では、「重衡救済物語」の文脈からは切り離され、「平家遺児処刑物語」の中の重要な哀話として位置づけられている。読み本系諸本の記事も積極的に取り込んでいく城一本の実態の一端を明らかにしたつもりである。

また、本稿で指摘した六代物語との連関は、城一本の特徴である巻十二の構成を検討する上でも重要な問題であると考えている。城一本巻十二巻頭の目録を挙げると次のようである。

しげひらのきられ
大地しん
こんかき
平大納言のながされ
土佐ばうきられ
判官の都落付吉田大納言
十郎蔵人のきられ
どくろごせん
六代御前
はせ六代あい女院出家
小原入
小原御幸
六だう
法性寺合戦
六代のきられ

六代処刑で終えるのは八坂系の特徴であるが、その直前に、他の八坂系諸本では分散している建礼門院関係章段がまとまっている。「女院出家」の前に「平家物語くはんぢやう巻」とあって、すでに山田孝雄氏が注目したところであるが、灌頂巻特立に向けての形態という関心ではなく、断絶平家の本文に灌頂巻を形成しようとする城一本の構成に注目すべきであろう。

物語の最後に六代の物語と建礼門院の物語を並立させ、新しい平家物語を創り出そうとする城一本において、「髑髏尼物語」はそうした再構成の一端を担っていると言える。

【注】

（1）高橋貞一『平家物語諸本の研究』第三章「平家物語八坂流系統諸本の研究」（冨山房、一九四三）、渥美かをる『平家物語の基礎的研究』第一章第三節その二「八坂系諸本」（笠間書院、一九七八）、山下宏明『平家物語研究序説』第一部第二章第四節「八坂流諸本の研究」（明治書院、一九七二）。

（2）山下宏明編『平家物語八坂系諸本の研究』同氏「八坂系諸本研究史」二五〇頁～二五一頁（三弥井書店、一九九七）

（3）松尾葦江『軍記物語論究』第二章五「平家物語八坂系本文の流動」（若草書房、一九九六〔初出『國學院雑誌』九六巻七号、一九九五）、櫻井陽子『平家物語の形成と受容』第二部第一篇「八坂系平家物語の様相」（汲古書院、二〇〇一〔初出『平家物語八坂系諸本の総合的研究』科学研究費総合研究（A）研究成果報告書、一九九六）。

（4）「髑髏尼物語」の先行研究については拙著『平家物語生成考』（思文閣出版、二〇一四）一八四頁～一八六頁にまとめたが、適宜改め再掲しておく。読み本系諸本の「髑髏尼物語」についての先行研究は以下の通り。渡辺貞麿『平家物語の思想』第二部第二節「建礼門院の信仰と融通念仏」〔初出「平家物語と融通念仏―建礼門院の場合を中心に―」（『仏教文学研究』十一、一九七二）〕、第三部第五節一「長門本と盛衰記」（初出「『盛衰記』髑髏尼説話考」（『文藝論叢』十二、一九七九）（一九八九、法蔵館）、山下宏明「源平盛衰記と平家物語―平家物語研究史を展望しつつ―」（『文学』四一、一九七三）、松尾葦江「読み本系三本の平氏断絶記事―読み本系諸本とは何かを考えるために―」（『平家物語論究』所収・明治書院・一九八五〔初出『軍記と語り物』八、一九七一）、小林美和「延慶本平家物語における文覚・六代説話の生成」（『平家物語生成論』、三弥井書店、一九八六〔初出『論究日本文学』三九号、一九七六）、砂川博「長門本平家物語と「坂の者」二　髑髏尼譚」（『平家物語新考』、東京美術、一九八二〔初出『文学』第四八巻第九号、一九八〇）、柳田洋一郎「平家物語と死者―首の語りの境界例―」（『梅花短大国語国文』四号、一九九一）、名波弘彰「『平家物語』髑髏尼説話考」（『文藝言語研究 文藝篇』第二八巻、一九九五）、山下宏明「能と平家のいくさ物語―『重衡』をめぐって」（『文学』一巻六号、二〇〇〇、岩波書店）、西川学「『源平盛衰記』髑髏尼説話について―観音巡礼を中心に―」（『奈良教育大学国文』第二四号、二〇〇一）、山下宏明「源平盛衰記の語り」（『國學院雑誌』第一〇三巻第五号、二〇〇二）、源健一郎「源平盛衰記の重衡―「非救済」の論理―」（『軍記物語の窓』第二集、和泉書院、二〇〇四）、砂川博氏「重衡は救われなかったか―『源平盛衰記』論のために―」（『軍記物語新考』所収、おうふう、二〇一一〔初出『相愛大学研究論集』第二一巻、二〇〇五、再録に当たり、加筆補訂）、砂川博「髑髏尼物語の形成―『源平盛衰記』論のために―」（『軍記物語新考』所収、おうふう、二〇一一〔但し本論文に関しては「二〇〇四年十月成稿」とある））、松尾葦江「源平盛衰記の「時代」」（『國學院雑誌』第一一二巻第六号、二〇一一）。城一本に関する先行研究は以下の通り。山下宏明『平家物語研究序説』第二章5「八坂流第五類本の研究」（明治書院、一九七二）、千明守「國學院大學図書館蔵『城一本平家物語』の紹介」（『國學院大學図書館紀要』第七号、一九九五）、池田敬子「城一本『平家物語』の本文形成について」（『軍記と室町物語』、清文堂出版、二〇〇一〔初出『室町藝文論攷』・三弥井書店、一九九一）。

（5）藤田徳太郎校訂『歌曲考』二九頁（大岡山書店、一九三二）

（6）『臥雲日件録抜尤』文明二年（一四七〇）正月四日条（大日本古記録）

（7）『嬉遊笑覧』巻之六上「音曲」（日本随筆大成、成文館出

版部、一九二七）

（8）山田孝雄『平家物語考』一二〇頁（一九一一〔勉誠社、一九六三再版〕）

（9）山田孝雄「平家物語考続説」（『日本文学研究史料叢書 平家物語』、有精堂、一九六九〔初出『國學院雑誌』大正七年四月号〕）

（10）『増補古活字版の研究』中（一九六七）八九六頁によれば、昭和十三年（一九三八）、「南都手貝町住」（現奈良県奈良市手貝町か）の百々恭之丞氏の蔵書を参観した際、「原装の美本（十二冊）」である同本を確認し、高橋貞一氏に報じたとある。同本はその後小汀利得氏の蔵書となり、昭和四七年（一九七二）五月四日・五日に東京三越で開かれた蔵書売立に出されたが（『小汀文庫稀書展観入札目録』三八頁・二八二『八坂本平家物語』）、現在は所在不明。

（11）前掲注（1）高橋二一一頁

（12）前掲注（1）山下三九六頁（明治書院、一九七二）

（13）前掲注（1）高橋一九七頁に小汀本の奥書、刊記があり、國學院大学本と同じであるが、小汀本は現在不明のため、國學院大学本の刊記を挙げる。

（14）山下宏明編『平家物語八坂系諸本の研究』所収「八坂系平家物語伝本一覧」（三弥井書店、一九九七）には、國學院大学図書館本、小汀文庫本、東京藝術大学附属図書館本の三本が紹介されている。国会図書館本巻一目録に「木街狩野氏之文庫」「吉田蔵書」の朱印がある。前者は幕府御絵師狩野雅信（一八二三～一八七九）か。所在不明の小汀本ではないようだが、今後調査が必要であろう。

（15）池田敬子「城一本『平家物語』の本文形成について」（『軍記と室町物語』、清文堂出版、二〇〇一〔初出は『室町藝文論攷』、三弥井書店、一九九一〕）

（16）千明守『平家物語屋代本とその周辺』第三章『平家物語』城一本の本文（おうふう、二〇一三〔初出『國學院大學図書館紀要』第七号、一九九五〕）

（17）拙稿「城一本『平家物語』の王莽説話」（『武蔵野文学』六七、武蔵野書院、二〇一九）

（18）拙著『平家物語生成考』第四編第三章「髑髏尼物語の展開」（思文閣出版、二〇一四〔初出『軍記物語の窓』第四集、和泉書院、二〇一二〕）

（19）延慶本には、

是ハ生ヲトシテ後ハ今ニ至ルマデ、一日片時身ヲ放タル事モナシ。朝夕二人ノ中ニヲ、シ立テ、明テモ晩テモ見ニアキダラズ。持マジキ物ヲ持タル様ニ覚テ、糸惜悲ト思ハ愚也。

とあり、表現が異なる。維盛と二人で育てた六代への恩愛の情の深さから、かえって「持マジキ物」とまで思ってしまうとする言葉は、父である維盛が、入水の直前に瀧口入道に述べた「哀、人ノ身ニ妻子ト云者ハ、持マジカリケル者哉」という言葉と通底するものである。覚一本に近いとされる『六代君物語』では「アカデ別レシ三位殿ノ形見ゾト人ノ持タヌ物ヲ持タルヤウニ思テ」（平野さつき「早稲田大学図書館蔵『六代君物語』」、『軍記と語り物』二四号、一九八八）とあり、「維盛の形見として」という意味が加わっている。『六代御前物語』にはない。六代を維盛の形見として見ていたという記述は南都本にも見える。

〈使用本文〉

【城一本】…國學院大學図書館蔵本（國學院大學図書館デジタルライブラリー）、【『源平盛衰記』】…中世の文学『源平盛衰記』一～七（三弥井書店、一九九一～二〇一五）、渥美かをる解説『慶長古活字版 源平盛衰記』一～六（勉誠社・一九七七～一九七八）を適宜参照、【延慶本】…『延慶本平家物語』一～六（汲古書院、一九八二）、【長門本】…麻原美子、小井土守敏、佐藤智広編『長門本平家物語』一～四（勉誠出版、二〇〇四～二〇〇六）、【奥村家本】…山下宏明編『八坂本平家物語』（大学堂書店、一九八一）